



門1利4
1965
卷21

138

江右

雜部二
4

比載高倍之

支本和歌抄卷之第一

改貞

閭 鶩 洞
確 岩 桧
掩 息 領
閉 枝 根

卷之三

三行八十九
三章下

立山院印

雪景齋藏書

祖承白首

四
六

而有石室而洞者尤甚

おひこをさうてかうるの

卷之二

文永五年五月一朔
國名也

文獻卷一百一十四

うるまの松原の波よとえ
のりまくらの内洞の水をそぞらす
流

文承子奉角日色中
同

卷之三

持信函

入月のあはれに從ふるもあらうか
拾葉散食のうち
家作仕事

拾芥錄

卷之三

卷之二

のうかにそよぎてあつれあつらどもや
きり

はるかに
洞門
塔

卷之三

王釋教

一
事
也
不
行
力
十
九

嘉慶二年白首杞山

卷之三

まちりかの巣のひよすくと人のかしわと

逮至八年而有之今
而二往也家也

おのづかのそよ風
さくらのそよ風

のあへ
ひすく

高僧錄卷之三

おまかづのうわくやうこそ

松
清惻初

此卷之題
卷之三

三月の事
春の氣は
まだ薄い
が、日は
暖かく、
風は柔らか
い。朝晩
はまだ寒
いが、日中
は暖かい。
春の氣は
まだ薄い
が、日は
暖かく、
風は柔らか
い。朝晩
はまだ寒
いが、日中
は暖かい。

江蘇之年四月某日乙巳採江注往印都

さうりとよのぬらの色

色

久安百角

花園左官家小六を

通

えねのれまのよまにすくとおどり

井

六宿歌

井の宿の木の宿がよみあしてすぐあ

もとまき合

注二位山陰

ゆきのいに寄りまくとよう風

家集

鴨長那

さかのうのうきくはくにゆきにうき風

常楽院付百角

左官家小六

千五百萬守合

はまむら政

かくのゆのゆとあくとめうきのうち

是後翁

かくのよのゆれまのよそりてそよよ

万代

持後正云翁

内閣のた山ひのよもよよう木の木の花さう

四年百角守合

内門院少掌相

おまかしのむすびのむすびのねよすく月

歌あす

近集入石園

事あは

ひさうにすりやうがれ

悲

わがのつまのわがの

わ

神のひきのまの

松

よしみのまの

共

わがのまの

わ

あがりけりや

君

家方御名

松木

よしみのまの

わ

永元年一月大納戸隣子爲守

家集

君

いはせ

君

渡

舟井河を西よ松岡もじされ河岸屋をあとくとえ

家集萬國う奈河のみりて

君

ゆき

渡

舟拾火かな

君

いはせ

君

ゆき

渡

舟井河を西よ松岡もじされ河岸屋をあとくとえ

君

いはせ

君

ゆき

舟井河を西よ松岡もじされ河岸屋をあとくとえ

君

いはせ

君

渡

花山院門大官

君

渡

舟井河を西よ松岡もじされ河岸屋をあとくとえ

君

いはせ

君

ゆき

渡

家主中一あとのを

後承前ト

ほへえすあつたのれのうぬ／＼よおきうちま／＼家主ひさ
家主え年ハ月全去法事下月のす合部ム

タミ注トシ注あつたのを注よあひとタミ注れまく教云ま
あま中一よきのを

めりは席

ねくらひつまゆのほどうとくらうじとけいとくま

西首注抱毛注月

あくまむれのねうわりして新もさくねまのよ月

みれどす本注いづのを

年注うひののをのむのむたゞの音とのほのうか

東源注千百首注いづのを

田注うづのを

あくやひぬまのん注ねむてやくじのまのん注ま

まのまの入注抱毛注まは

ナミ注とよたうまのまゆうじるけまひ

多め院入注まわ教云まみ千首

ひもうひりうなれよひとてかくにまくよまのを

檜原

くれ

櫻性法師

百首序

鷹司院接案

拙のひにあらまの山あらむるひよりせ

歌⁴ 三行分上

正治二年百首

正門内書

谷⁴ すみをうらのすみをうれねようくうちすれ

一百首序

は鳥羽院の裏

音すみあらわらやみらぬんすみのねの峰

海居富次百首入⁴ 列

立處も石

もものりきよじく⁴ まもとすみあらさの枝

また八年百首可合⁴ ほり葉内書

君のうみうけらうひつめうとハの月日月日も

日 立處も

立處内書

月⁴ もうりぬみてたまゆあやうみのまのうか

は奇判云⁴ えくに云く奇判見⁴ 奇立處

夢の盡眼遙遠凡境可⁴ 遠遊ゑ君みをま

奇是⁴ どく文集のゆくはまくはまくはまくはまく

月⁴ もうれどくはまくはまくはまくはまくはまく

まくはまくはまくはまくはまくはまくはまくはまく

みをまくはまくはまくはまくはまくはまくはまくはまく

又新百首山

なうちのうづきをすかうすかわのとくのとくを思仰天

千首寺経年

佐三佐森志

ひきのまなあやうすくよがれにかまらちと

新昌院寺合院

よし

え代へりつらしみ古やうの峰峰よし

あ集祚祇峰よし

佐美

詠のまよこうの峰峰のつるきよのよのあめと

歌石集峰よし

峰

9

楚急

かえりまくまく百々
かまくら

馬のあつまむいじくまくわくわくわく

ま保四千一百四百す中す中初とまがん

ひまくまくわくなうと一富士のなのまよのうだら

おふか

万十
のまくまくと一過

おぬ院入て二郎新とまく千首

狂歌師

ひかぢかのまくまくひうまうたひ昔

ままくまくまくまくまくまくまくまくまく

まくまくまくまくまくまくまくまくまく

まくまくまくまくまくまくまくまくまく

新千萬

歌集

ほのまくまくのまくまくのまくまくのまくまく

まくまくまくまくまくまくまくまくまく

まくまくまくまくまくまくまくまくまく

まくまくまくまくまくまくまくまくまく

源通

かまくらまくまくまくまくまくまくまくまく

旅

10

多忙

衣笠の音

思

あぬのふくらひをもじのうのえでらそゆひうれ
あぬのふくらひをもじのうのえでらそゆひうれ

達保三のスホ百首

達保三のスホ百首

新後拾遺

門

うねうみの里の

すく

冬月申

かう門院小宰相

友

雪ありにうのとすくうらのわらよ人を

前大納言也

あむすすきのまおおわくにらせのうけを

原中イ

西宿ニ年百首

前大納言也

みよめのうのとすくうらのわらよ人を

むなが

白首四首

少齋院内解

みよめのうのとすくうらのわらよ人を

むなが

仁安ニ年二月す林苑通活

むなが

うけをもひうるもくねそてわらうかく

むなが

正月元日

は應る年を

むなが

もよとつよおもんまくわらうかくのむせよ

むなが

みよめのうのとすくうらのわらよ人を

むなが

歌集

後集

むなが

今
ニ

鳴

高

山中へひまでもありまじめにすがりのやひにひる
ひすのたとてうとうとく

象あそぶ

元姫

さわらの山根とそれらの峰なりやたのものやま
をもるよれとうづくとくてのま

言葉

まきお

櫻

さくらの木の木の木をさくらとつせさんねまうの

森まぶしがれの山

雪むほ原

タクレやたりの雲をこむれけはすくまゆかむくの

あつむかくすすみてけみのうち 日

柏根

三行分上

陸引しゆる付

浮ひだま

ちくぢくひのまはくよひよひとくすのね

貞無二年六月吉日

民すなむ

さくらのたとひの木やまにゆきもすの木すねの

三行分下

はなはる入多國

さくらの木やまはくよひよひとくすのね

百首四章

四庫院印

12

かひゆて山のすみかうすれてるのさうにかくも

達也八年百首の合 総集大和

星のすすくはれひの宿にほそをなすひ

すゑすゑ

新拾鷗

ニラ

おも中納言

えひゆすゑをゆく背のうをえやつまわ

ぬきうの毎日とまゆ

風の内歌

さゆひすゑをひしめく風をもく

月照湖あまうのまゆ

西行

家上

やまゆううらのたゆとひしめく風をもく

あまうのたゆ

太納毛野修

か

三事

はすけいづみよどすごくまよひのくは

人のあらそとようとく

え義院入室三事歌主あ幸三喜あ

津下室花

か

ひまつひよのまゆとたゆのなよりやひせ

ひまつ

ほ

墨入室持政

か

ひまつひよのまゆとたゆのなよりやひせ

ひまつ

せ

ほく

か

ひまつひよのまゆとたゆのなよりやひせ

か

ひまつひよのまゆとたゆのなよりやひせ

せ

ほく

か

蒙古文

都道府
のまのまゆ
とちや
五田乳三
向利

古今類考

卷之三

一見丁
謂
生馬
伊

卷之四

龍門院

卷之三

おのよのじ
おもてのまこと
おもてのまこと

1922年10月

卷之三

風とその毛

その書

王
神
不

は奇ひあつて
ほのひの山よろりて
か

の半
いのちよ
け
はゆ
くよ
うと

تَعْلِمُونَ

此書之傳者
其後又傳於
日本者也

都君寫
三字下

卷之三

嘉慶九年
欽定古今圖書集成

けいはき
入る
かく

江東先生百首卷之二

卷之三

五
文

冬
4
馬のあらわし

三行八力上復

卷之三

蒙古文

万ナミ
大和

あくとあくは
うのむれゆくもの

鄧
居
和

万
吉

千金百萬不可舍
注桂陽縣

白香山集

内々かうそはつ
上ほ

四
卷
之
一

門
元

鄭集

和至の
事

卷之三

於厥經而有之

雨中之秋

えほ
おもて西のうつみの山のまへはりこむるよのえ

お寺中ひのくら

氷

玉枕下わくのうつみの山のまへはりこむるよのえ

春風草美傳石

寒

大食のうつみの山のまへはりこむるよのえ

北洋

とてりうのうのうすすまくらはのせんそくけ

きは園やのうけのうせんそく

猪の仲ちよ

万代
猪の仲ちよの年のもくひもくかくよのう

酒

うわ

人丸

かくのゆまくられがくのゆまくられがく

人雲

かく

霞

あ須二年とまよの会

見象門

内にまひうのうれ波

ひあうのうけよかか

か

日暮十首

中

み

はまの院

い

おとづれのうと出のうとゆうあとのうと

思

ゆふるやひうとく

うのうとく

か

三章

三行分トル

達保二年四月

御文

之山廬之水
入溪小窗西

卷之三

四

隆武

中
國
歷
史
上
最
早
的
文
字

卷之三

卷之三

卷之三

新六五

三

常熟人名

卷之三

えどやうのあはながくうてれのまこと

今思量

宣政院用印

百首之

卷之三

事也 ちのすこのつらひのうへんからん

とて

風ふゆ波

新アラタ あひのうちのうちのたまひを内にする

生もみ年書三中日

ちづれよだねすまくマク (以下缺)

文永年書三中日

同

年ナツ そひよあひの度カタ てシテ あよしよ
かき入りとれりあひの音ニ 月のひそのおり

家集丸

雪りと人

年ナツ そひよあひの度カタ てシテ あよしよ

速ハヤ せん年ナツ 有アリ す合ハタチ ほ 一イチ ほ ま

やま

日

注メモ はあ

年のあひの度カタ のあひよどりしきの度カタ

春ハコ すや 月ハキ ま

福集丸

かくのとひの音ニ あひよどりしきの度カタ

歌不氣カシム ト

よもぐ石

モモ 万十二マツジツ 雨段ウダク あひの度カタ あひの度カタ

六二ロクニ 日

源吉文

わき日よすのたまをうつりきの思スル は

18

はあらゆる事に
心を注ぐ

清江先生集

春の日は
おもむく
ゆきのそと
かわすら
ひやうる
せんじゆ

清江子
酒後言
江

日落西山外
萬物皆可憐

思
三
行
力
上

邵

二

達也八年而首立名
成
叶

三
年
不
可
以
知
其
成
就

色

१५

四
五

乞
乞
乞
乞

卷之三

丁亥六

四

卷之三

やうどひのあすみのゆくとくのをうかが

こ
れぞのゆゑにすと
せん

ゆうねのあじよすくやけ

二十一

紫の花を咲かせ
る。あわてておひるの家を出で

の事にあらずと申す。されば行山はよきもてす。

まよひみ年あまうすは海のまことひ

程
朝
國
民
主
政
府

卷之三

居間中
は一衆入を圖白

のすゑに
おまかせ
をまよひ
てはとく
康やうめい

我
紀序
王
七

卷之三

霜草

御内閣の内閣令
事人

亦是の女の妻の所と云ふ事と
ゆうておもひて

清音錄

同

某嘗於某年某月某日
於某處題

卷中初之通名

まかはれの里も
お
お
お

卷之三

あやめのすみどり年少のうらの橋村によみちをと
竹子 3月のれを

まわる程
は
や
入日
お

嘉慶二年丙子夏月
吳昌碩作

ひきぬけ入日のまづかせ
まづかせ

六
六
六
六
六
六
六
六

四

莫
不
以
爲
是
也
其
所
謂
事
業
者
也

嘉慶二年古首思集
汪之經乾氏

此卷之首有題記云：「宋人畫花鳥草蟲，多以淡墨輕彩，不求形似，而得神妙。」

卷之三

文永二年七月白門
一
高麗
淨傳寺
卷之二

11

まうとうとうひのれれ又あくまつれまくせき

病氣うめうけい

山陰

衣裳いしやう

まう代まうだいのあらわのうすやねもさわの色いろやまく

松まつ

まうまくす

隼

聲

梁塵りょうじん

竹たけ

即石花そくせきは

同

鈴

新勅しんせき

百首ひゃくしゅ

或をひ

前中納まぢゆうなニ宣嗣せんし

ナカヒロ

ち

まうのまうのむうりに原はらう

まうのまうのむうりに原はらう

三日草みにちくさ

同

聲

新勅しんせき

百首ひゃくしゅ

或をひ

前中納まぢゆうなニ宣嗣せんし

ナカヒロ

22

蒙古文：
山田花郎

かくのを

原仲一

あまくまの市仲
同
古

卷之三

よしやうわらひれ
たまはくを
天にち昇る
ゆは
在る西都御所
けの屋
ひ

文永二年七月白月有吉
之立春後卯酉

卷之二

新嘉坡
隆興公司

まちの
あは
のまくら地と
風の
知

卷之三

ほ
け

王居士內名而以廣
任初

元治の初夏に於て
源氏物語を讀む

水東之年，其惟子也。故不以爲子，而以爲君焉。

家集新拾雜中

うそをとむる事もあればあらゆる人のわれわれの事
をまほ入る二三の歌とあみだすをかね流

後三絃花鳥

つちとせらひとくもあらばよきものとのねの極

法のじてとくいのれられねまとうものだけにうさ

遠きは年面を多会

意見は原

春の向ふ井のわとぞこれに萬のとすとぞ

養カ

思様衣カヒノカヒの食

は九葉門を

望むて身のきのきのじよへりやまとおさづく

六七歌

三月の月カ共

かしらより井の水

修業歌

固カ

事カ

冬音中カのうのう

立翁

江のよんじとくのうのうのみうつり白ゆ

君

角保之年を春カくたつゝのまく

母

前半納言通原

とくにこの神のうへくとくにうけのまのう

若

かうてくやかのうれむとあらわよのまのう

も

降河院の角百首

後半を人取事

淡

せき

ゆきかぬやうのむかひりうちとすよあるくよ河瀬

てまな森林

ふしのむら

森園

つうとう枯れよやうまれのゆくのうにむかはるん

歌ふる情中

もの

音

まうのれうきみがりひと思ひかくさうづきめ

を

音量四百

あゆき人をみづけたのとてにあひて

歌ふる音

の

飛歸

どうそひのえす立

よ

人を

立

めのこもみくそくとすまゆとのゆみの秋の観

貞急二年より冬節

お

歌

白露よとくらむ風

せり

秋

等判官春藤翁去は思

秋作

歌

れどやのまわすてめりよね門とす

尋

歌集

歌

20

六六なれをよみくわいのきこくとて行へりてれのへ
ちくわくわくわくあくとくわくわくわくわくわくわく
悲

捨手傳教院

悲

おなじ

あれのあくのねつをもうちうてまづりとる

水素の年と月と納と秦憲とあす合

墨を

白浪を吹ありのとくとくゆかあさのれよおのを書

おにた率とも

わきのたう津

高中納と傳えん

秋はるあきのれれわざくらしすひやすらよのわ房

あきびのとう

あた納と傳えん

家集

ふあ

あた納と傳えん

王族

万二

秋のとしのやまとめとくわん

君

東屋の年と月と納と秦憲

西と傳えん

新拾旅

今宵

あきのれれわづくらしすひのとくわん

わざくらしすひのとくわん

君

万三

秋のとしのやまとめとくわん

君

新拾院入と高就とあ卒首税

らぬ

あくのねつを

松

あた納と傳えん

あまきのねつを

松

あた納と傳えん

あまきのねつを

松

あた納と傳えん

あまきのねつを

松

あた納と傳えん

27

29
なつ
あく秋とゆきのねうのやまと奈良あそびの間まづや

六種歌

日

みやこせやかみへ日のくまも思あられ

若菜

な

文無え年をむかひてあま

日

さくらにあすのちやまめんすくわあくつり

日

歌

日

遠徳四百首初意

跡

う

さくらやさくらのよのねおひ

日

歌ふる

日

秋月のひじりありのあくまのさうせ本のくも

跡

う

遠徳三平、
さくらの渡

日

さくらの行きやくさくらあくまのさうせのれりとく

日

歌ふる

日

さくらのさくらの秋月とさくらの葉の書

日

水のまくの秋月とさくらの葉の書

日

東海三百首五四
さくらの入倉指政

日

さくらのさくらの秋月とさくらの葉の書

日

さくらのさくらの秋月とさくらの葉の書

日

さくらのさくらの秋月とさくらの葉の書

日

さくらのさくらの秋月とさくらの葉の書

日

思

霜夜

王澐
王澐字元之

御書
さうのじゆく
すよのまことひ
れのじゆく
東流二年百首
みつ
ひ
凌空船若波月
まくらゆふねくわふのうづのくわく

東坡院入後二年記之仲和年首思齊

南中納言常行

おもてのゆくの里れどもかひじ

中務就正家卒之寢棺修訖云

とくに
わざわざ

左君年紀康

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

卷之二

萬葉集
卷之三
歌四百首

義理争中

はれ翁の言

いきなりさきわざりてうまきのあけみのたのめのを

源川院山内百首巻

階満法師

猪

おもておもてやほんじよくにまことのとくす

曰

莫

おもてまほ門

を

現

鳥市中

漁業者

人のとおひのれづかく余つのわづかく恨

百首四奇

莫

善慈和焉

わゑひゑひのまゝおまをやひてやみもの

①

セーラー

①

○拔

三行分上

六題

正三位知家卿

山人のかへろこさかみみちのへにおはやすけなる下

わトイかな

新大

道

道

衣笠内大臣

を

うさと人

道

新大

道

新大

國書刊行會

堀河院即時百首

權大納言土實卿

公

ますらかめらさかみちもあとたてて雪ふりにけり

衣かせ山

文永七年毎日一首中

民部卿爲家

老みちみかさの山みさかにてありに松のあと

をみるがよ

つゝ一へまかりける道にて橋のさかを

太宰府大貳高遠卿

故

ちはれなりむわいの袖いかほらやと花立花みなさかや

こくえす

廿二年三月

應和三年九月河原院歌合うりふ坂に霧降

山城又近江

よみ人しらず

ほかようもまやそふらん秋きりのうりふゆさかにく

らくも有哉

なにたかくねりはしぬよしうりふ坂霧のみたては見

くえすも有哉

義久二年四季百首秋山

徒ニ位家隆卿

神代よぐれありにし山城

くせみさききか久世山城

みちにけり



正月の日記



セーハー

林



佐治

ア

佐治

32

四

西入道年十四日直輪高乃所

山

アラリカタシマの松の木の下に坐す

シテ不思議

トモ

アラリカタシマの

人名

思

アラリカタシマの

人名

アラリカタシマの

人名

アラリカタシマの

人名

アラリカタシマの

人名

アラリカタシマの

人名

アラリカタシマの

人名

111 - 114

新勢
新勢

卷之三

卷之二

まね
月 ちうづの坂
月 ちうづの坂
かせよ
欲
みの坂
月 月
を花む

卷之三

タユノヨニサカトモ

の勢
済

鳥
え鳴る
坂誰

卷之三

卷之三

二

あらまちのまへにさくらのえ
あやまつてこのよひすこえていたもあれハ云々な後はあひ
東路

卷之二

宋集

の
にこゑかせ

卷之三

5-
この本のことをよく
考へておられたと
思ふよ。そのうえ
おおきな手で書かれて
ゐる。それで、

地
天
地
天

1

わざとまことに上に立つ

四

かくしてさうさう
あらわすのゆゑ
色のよきと
あるむる

張廣

卷之三

忠

五月五日は五月の事

二三

西居ニ年百首

あま初ミ陽房

庵

いづれへうけらにまつりもりやんとみだらかにかす
東路 振る事度々通ふ事す合感あわむ
わざわざやさんこのことうふやめりふすくやあきの
惜

東國風俗冬年

里製 簡簡法原下

手作

ひまわりうすひの坂道

源

ひまわりうすひの坂道

戀

わら

御事の匂の

伊勢

中納言

せうよのをゆく人間ひづりのとて神づれ御を

相模四寺

相模

あく

足柄

足柄

のまくわくことかのあくしふくとこちて

限⁴ 行分人

同

三首卒卒中

好惡

魚^トに^トうらや^ムい^シの月を^もの^のと^れり^けい^ると
ま^リす^カ魚^トを^とり^よう^めの^やう^すま^さき

七版歌 限

悲

か^ハ二
そひうみの^のな^まあ^はす^かく^れそ^とり^たう^の手^て

西詔^ニ三首百首

限

三^ト衆入^ハな^な居^ス

監^きが^ハま^ハあ^はし^まわ^かの^のと^くす^かす^き

西詔^ニ三首百首

限

悲

ア^ハよ^ハシ^ハま^ハま^ハう^ハぬ^ハ浪^のう^ハ月^のく^ハ波^す、^ハま^ハか^ハか^ハ

長^キう^シ魚^ト

よ^ハく^ハ人^トあ^ハす

万^トも^レく^ハよ^ハう^シう^シて^クり^ハあ^ハう^シの^カと^く魚^トの^やう^シ

家集

重^シ

被^シ

重^シ

家集

重^シ

被^シ

重^シ

被^シ

重^シ

被^シ

重^シ

柔^シ歌^シ経^シ

35

黒木よスアラニの川セヨテテアレホトムク
達保ニ年スルハ前首 無事向行
アケアラモモカシマサアニニアラニの事セテ神の事
スル行く

日

葛木萬光

アラミ林よアラニ風うつモアレトウミミの聲
文監ニ年スルハ前首 皇太吉主を傷害
キミミヒヒの坂川ハナメモキシラ言語にて
貞永元年八月ナヌ夜也明け申
祝事

アラミのアラニ風の坂川風シテアヌモアラ

脚4
三行分トル

トモ人あらず

アラミの通ハガモキアレヒトヨリアベシトハ
道

聖名の象

アラミ

アラミのアラニのアラレモアラモアラモアラ

前中納ミ室家石

者入内アラ屋内

アラミのアラニのアラレモアラモアラモアラ
文治元年は京極後政源吉ナ首肯合意
もうひやとうじひねもあらのあとが下

家主萬光仲

源仲正

アリとアラシのアサヒカサイハアマセトカシのアラシカサイ

ウサギ

西三位

アラシ

アラシカサイ道カサイキツツキカサイ胸カサイ

アラシカサイアラシカサイアラシカサイ

アラシカサイアラシカサイアラシカサイ

皮カサイ筋カサイ

アラシカサイアラシカサイアラシカサイ

美金村

アラシカサイアラシカサイアラシカサイ

高カサイアラシカサイアラシカサイアラシカサイ

アラシカサイ

思カサイ

アラシカサイ

アラシカサイ

アラシカサイアラシカサイアラシカサイアラシカサイ

アラシカサイアラシカサイアラシカサイアラシカサイ

アラシカサイ

アラシカサイ

アラシカサイ

口

アラシカサイアラシカサイアラシカサイアラシカサイ

新六二

アラシカサイアラシカサイアラシカサイアラシカサイ

アラシカサイ

人丸

アラシカサイ

阿志の義卿

か

家集

アラシカサイアラシカサイアラシカサイアラシカサイ

アラシカサイアラシカサイアラシカサイアラシカサイ

アラシカサイ

總言歌

口ひきのうれうせかすよまく思
思 涙

千五百萬守合

みちを哀

ほよびに

人のよきうねりあがむすひつまうせりへれ

かき首枯面首

意難わる

かきひきつまうのつぶと町あらへてのうす

文意え年魯言集三中郎の力歌

けふのやまとにはのなまくひあめうせのうす

うすめ守合

隆佐野居

あくわくこ程成くよししくうせ道

後城山女

さうううううのうちくいはくのうす

文意言年魯行前室氣は高佐接取

なうやうのうちくいはくのうす

歌へのくらなむお院よとそまううす

かくもうう

よのじのうかのうす

かくもううのうす

家主おのれ月のうす

かくもううのうす

かのよひをかのよひへはうづく

続古今雜下本

後承御書

隱

かのよひのよひにかれてすのひへはうづく

花月百首四
年

はま夜行抄

かのよひのよひにかれてすのひへはうづく
あはれ

遠海三年冬夜行抄

西行信忠室石

かのよひのよひにかれてすのひへはうづく
思

かうやおの念きのむち 美庭わる

とせりとくらひす

木

信忠室石

火

かのよひのよひにかれてすのひへはうづく

至

かのよひのよひにかれてすのひへはうづく

日

かのよひのよひにかれてすのひへはうづく

月

かのよひのよひにかれてすのひへはうづく

火

かのよひのよひにかれてすのひへはうづく

水

かのよひのよひにかれてすのひへはうづく

木

かのよひのよひにかれてすのひへはうづく

かのよひのよひにかれてすのひへはうづく

39

れどもまことにあひてのをまかしてそりだきのをとせ

卒九百首菊のす

ねくろの

かまひた

四十九首菊のす

菊

かまひた

文永二年曾てそゆ

みくわの

脚

かまひた

かまひた

花すか一やう

家中納之宣家

ね

魚河三年九月河原院す合宿旅人

の

をすまひにいはるのあはれわせやれとまへ

あまのちまほすそよぐのまくらひすまうの様

まさか

かまひた

じ

あえ二年十一月右吉處寺合宿初日

は

花すか一

四十九首菊のす

の

西行一人

かまひた

の

脚

あえ二年十一月右吉處寺合宿初日

は

花すか一

四十九首菊のす

の

西行一人

あえ二年十一月右吉處寺合宿初日

は

花すか一

四十九首菊のす

の

西行一人

通

まつら月のひづけ通 ひづけの
ちをの

多喜傳写寺院久落子住二宿落

かくじてかくじてのさうつてのゆのうた

西首キル所元 三波罪通

行うようけのほきとすなまうとそすもひの

あ翁三年百三山猿

中務のと通倉

かね御四寺元 いとよ山

かくじのひのあくまくしりてのゆ

野翁初ゆきのみち

母は國へ

よし人を

日元 あわ

万 ト

もよかうにひのまにしたのうよくよよが

カ かよ

日元 韶

かくじのまよくまよくひとまよくせの

カ かよ

日元 まよ

まよくまよくまよくひとまよくせの

カ かよ

日元 長

まよくまよくひとまよくせの

筑紫

41

先後約度すうち多言之而三往御船石

今
才と色あらかきぬすくらだると風の半身へりも
稍

歌不氣あら
人あらず

万十五
あ風のうきのやからへりゆけと山の山をあ
行

徧高松首あら
捨傍山の約

白いものとみのよしよしもへるの上

猿寺 東河

高市黒人

波

アリ秋もひきうるもとれうすみの下りよれ

旋乃寺

カクニキ

護人尼

行

アラシのねにあらはくまかひはあく

日

至
豊

アラシのよしにせらへるみのめりぬと

戀

山

あち八年百首の合 衣を青の官

アラシのよしにせらへるみのめりぬと

山

泊瀬
アラシのよしにせらへるみのめりぬと

山

中勞のみを塗金

アラシのよしにせらへるみのめりぬと

山

羽院御政家百首猿

鷹鶯門院祖

霞

アラシのよしにせらへるみのめりぬと

山

ふみ音を合ふわ
具歌あら

立

いのりのよしにせらへるみのめりぬと

山

續古雜下

42

ひま

なほほむ令間

ちやつめの申すまへにづくひるぬとくせ

口 カその申る

牛糞のみを邊食

ひと
金れぬもてわがいでのと二月すくに申の事

あまもあは

ひとすむとおうひをきされ、相もそしのつまき

西まで奉書口を申

恩の内

さうのふらよおきよとあてておにじのゆく

以もえひの吉方と首守合あつた

えくらんあひのゆきナケさればるまつあくまのけ

延二佐並

せひ野人の神やうりんきりあきのうのく風

口

かきのり

鹽満

左葉卷

口

のうのく風

小

通

吸

ひのうのく風

我

通

正張

おまえのとこ

せの申らね

お葉

絆

通

葉よくありもナラすそれすれすれかくわく

毛

中

毛

通

正張

おまえのとこ

せの申らね

通

正張

お葉

絆

通

仁安之年家有奇合利為像也

五
夢
大和
セキ
賤牛

卷之三

懷
もとまゝのやうな
被笠野人

雪
中
之
景
物
也

四
三
三
三
八
九

塔院少阿而目

卷之三

卷之三

三字下

枝馬相みう蜀郡の事に之を車駕

馬一かずさ五郎、
後ひ武イ坊

常行之也以蜀郡之今之有也

蒙古文

本多忠重

主事者御用事あつてまほらわゆる事
のうよかんむりをうなづく
付る

卷四

五
本
卷
之
一

卷之三

卷之三

はくまのくわくわくはくまのくわくわく
はくまのくわくわくはくまのくわくわく

一
橋

卷之三

卷之三

西人

卷之三

院
卷

5

又回憶の月のうつゆ往來

北思

よあくさん

卷之二

卷之三

西漢二年
百首

二十九

つまむにあらとすかひらの波よまんすらあらもまの
義磨二年西をあたる西之佐和山
つまつて月日をくまむ物引のとひまうあて
清門義山がさるは
千里

ちかくてすのりてせん行しつれのくわくはま

きぬ二年九月歌まひの歌手合

有事歌

あまのうわさのうりてしゆじいくく月のすく渡

二字下
はすすけらるる春のうきよを橋是有物
橋河と鳥鶴橋とつもす橋と樹木
秋の宵夜比よりすと橋とつもす
枝音よととば林とつねりのうす
きどもかとくらまく

永久二年四月春照像 僧れわら

いまのうれびのつけ橋やのくと暫

むなか

以ちて年西口と中取るわら

橋もこうべやのくと
まよれがあれを衣白とよ聞こえうやまのく

景二年四月春をめあの中初と三歩

九
空

空

卷之三

はし

卷之二

水

之
而
已

橋中筋のみ煙全

馬今之子也

渡

日
月
水
火

法眼名跡

川
昔
多
奇
山

卷之三

三季下
ひ奇の康え。年慶爲むよ活くうそ
す。川のうらりを金。かのまくら今
す。

うそつことわざうりけいはん

白雲山房

卷之三

湯治院の内里有橋

足仲船下

一渡

まちにうりてよしむらのまつりとくわざさうにまわ

四馬中

はる院の裏

まのまゆめりのまうぱりうわき物

能不幻夢中のむけりとく人不思

ちうやう橋もとまくとくとくあみぬの外れ物

黒あさのふく

まの君も入を接取

まちとたのゆくゆくゆくとくとくとくとくとくとく

蟲集持こ毒

みはまは原

まちとたのゆくゆくゆくとくとくとくとくとくとく

達にと年をとそと橋下元を中和を宣

あととたのゆくゆくゆくとくとくとくとくとくとく

家集行河寺

橋下初云多處

まちとたのゆくゆくゆくとくとくとくとくとくとく

内家船一百首

橋

まちとたのゆくゆくゆくとくとくとくとくとくとく

家源二年百首

ほな多首

まちとたのゆくゆくゆくとくとくとくとくとくとく

花市中

橋

まちとたのゆくゆくゆくとくとくとくとくとくとく

お

まちとたのゆくゆくゆくとくとくとくとくとくとく

歌不知

平政村翁

古來歌

津

のる時の人の江のひ

竹葉渡年とえよ

海老船

まか

やみよきうの川

風よひよめり

玉葉賀

雲

あくのくのくとがくとを

上

ひかりみくわが

さすは今上の御位の内お納ふ三位とぞり

ありつもとてじ階てゆきもとくひやひだら

ひだりてどくく

人吉あら政

文永二年毎日三中

民ぐるも家

津

のる時の人の江のひ

橋

すれはまよひに船め

捨多月をやまひ

明義は原

津

のる時の人の江のひ

橋

すれはまよひに船め

文永二年毎日三中

民ぐるも家

津

のる時の人の江のひ

橋

すれはまよひに船め

四条あら井

通

置

走

文永二年毎日三中

民ぐるも家

津

のる時の人の江のひ

先

やまねよひ

渡

文永二年毎日三中

民ぐるも家

津

のる時の人の江のひ

先

やまねよひ

渡

あかはくじよまきすみのこ

思ふ事
思ひます
君思ひます
思ひます

月
一
早
大作高木

千鳥

同上

波

橋行里あはれのまゝのうき

丙子二年四月東山寺合酒以志

程橋十七

之子也。其子曰仲孫閱，字子房。好讀《周易》，嘗與張良、陳平、樊噲、陸賈、韓信、張良、蕭何、樊噲、呂后等俱爲漢室謀，皆成大業。

人間の心は、物事の本質を知るが、
その元の形の本質を知らぬ。

卷之三

信濃
妙見山
橋踏相換
凭

卷之三

卷之三

西漢書

かくの月をも
とての月をも

橋院少可而有橋中指大納言之子也

トモハシ

卷之三

新勅雜四
卷之三

故人不以爲子也。子之不孝，則無子矣。

卷之三

卷之三

拾年勸善方心

蒙古文

卷之二十一

まつ

卷之三

うながすあはれのよみがえりあまく
わざま

はるかに
古霧中
眺る

こする
な

江之水也。其水
如之何？

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10

まくらのまきの檜の入をもとめあわせを
文急を年七十百首 重くわゆる
うみの水の松楠のりよけたれやうやう
赤葉院の西よりそ拂ふ一葉死

句
性理之學人所重者

御内裏の御内裏
御内裏の御内裏

2

卷之三

永久五年九月吉日奉書
右馬守令秀

三國志下

大正
年
月
日

四
里
百
首
不
足
喜
意
共
踏
源
頭
四
小

也。余亦以是年而歸。其後未嘗不思。

タエ
タエ

元橋

卷下

卷之三

萬葉集卷之三

三章

は等行勢起云山裡のそりよりあきれ
る月のにせうらのあたりうらのまく
あ、おとととゆへてぬよかうりづくと
りとひそべをゆほとよとののとと
りふとてとくとも

意中榜やのと

多喜門古

印ぬうるり

橋思

百首子

常一法

法下室田

月にハすとまくさうひしもうかくめうのね

風

遠長軍曾て中

因房威士流

國名内家

トト

雄

天河

お風の水の水うる五月あよましとまくまく

庚午四月二日禁月報主處合

加賀人

着つれやの

天里

人不

ひくいのとおもひくひぬかうたむくひくいの

御宿おとするよき

かのじ

白毛をあまむとゆゆ

ぬあまゆかくひがくうくのとくとくとく

近江おとすのとく

吹葉力自

か

54

吾のうのとのはまつてまくわづかくやうだよ

蘇葉

渡船船

夢

秋水

阿まくまくぬまの浦

渡

承万三年五月平野改命す

橋

加賀改年

五月のあひのまゆむせきとものう

橋

新集するのう

橋

鷗

渡

文萬三年七月西首

渡

あくううとのあうひにきてやまく

渡

坐集

記序

橋

百首

序

橋

舊

音

橋

坐集

記序

橋

我

音

橋

歌集

序

橋

あくううとのあうひにきてやまく

橋

文萬三年八月百首

序

橋

わくううとのあうひにきてやまく

橋

度

思

もす中

往來船

跡

雪がれのうあみのくらわへぬみゆひを

搞を

すくふか

住吉

ありとへやひよのきをさむかひのまに

草葉

おとめを壁房は

里

人をもじよろもにけりさうもの

橋

わくのまくらへよきのまく

難

和泉歌

我歎

天正元年八月移歌わん草子合歌中興

名子酒

ト小舞

あらだまつ秋水をのづくつまみのて

思ふるか危日死を爲よけたまく移りよ

旅人行あ

轟

夢路

こののうすかよしむなまのくわゆらまく

承天四年七月志賀草子合意

あくまくまくの川のこすひのまくそくまく

百首草子

波二位盡

吉野思

波二位盡

さくのくわくのくわくのくわくのくわくのくわく

をまく

琳覺は原

脚

56

欽定四庫全書

晚晴簃詩集

庚午年
夏
王
作

國之大寶也

吹

山城威勢
やれしのうへ
涙してあひゆく
かまくらのうへ

おのづのまことにあ
山城盛梅作

山城盛梅作

蒙古文

之五
橋始於此也

只のやうのうそをかうて身ぐらひのまへ
ゆくのう

三

卷之三

一錦

卷之三

5
ひすひよの里うちやく百百うりそ
ゆきあはよとへやくのちよ

5

三

四
葛城

و

蒙古文

神

葛城

橋

歌ふ

口

歸

六三
萬鶴やりすすむらのつまうせゆもすむせゆ
神樂歌

思風入念極故遠面首橋よ高年

うちのつまー

おお

紅葉

錦

歌ふ

歌

うりはりすすむらのつまうせゆもすむせゆ

あまみをす中

近ニ集散

うらみ

六四

万七

うらみのうらみのうらみのうらみのうらみ

年念法師

あつちかくらん

元

壹もは師

三河

日

うらみのうらみのうらみのうらみのうらみ

中贋

のよ

八鶴のあづみの背ひきうらみのうらみ

達仁二年五月橋下花多種わら

58

風ふるむる水うきのやめのすくいあはきのま
海道筋次百をやつて轟波のむら
すよさうそものうけくわのわくひきりた

赤糸

相模

音

おれまやのひづるのとまりさくわらのよ

歌ふかひ

うじくらうす

年

おのとくとくとくねの移つようきすは橋

橋事

お久里年百首

おは

二重太鼓とお主殿

扇まつり

ト活火とおも

總

歌もゆ

歌

川

歌

渡

か

歌

歌

歌

吟更

西門院

歌

歌

歌

歌

歌

歌

屏凡

歌

歌

歌

歌

歌

歌

渡

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

歌

59

朽

風

寒

形^{かたち}取^と放^{はなす}

人丸

かうけのまゝ橋^{はし}取^と放^{はなす}

はまろ

大^{おほ}年^{とし}遊^{まわ}紀^き方^{がた}屋^や風^{かぜ}宿^{すく}と留^{とど}

幕中納^な通^と肩^{かた}渡^は

ゆきゆきとてゆきくよたのへとゆきとゆき

春^{はる}葉^は五月^ごあす中^{ちゆう}

西^{にし}引^ひ人^{ひと}

すみよしのあ務^むうねめまハメ^{ハメ}ソシムハシテヤウ

山^{さん}中^{なか}草^{くさ}拂^は下^さ花^{ばな}

はまむら拂^は改^め

あやものあふれりぬ派^はのうそかよものらゆ

達^{たつ}経^き年^{とし}冬^{ふゆ}音^{おと}

西^{にし}候^{まわ}定^{じょう}

ゆきゆきとてゆきくよたのへとゆきとゆき

秋^{あき}葉^は十月^とあす中^{ちゆう}

舟^{ふね}定^{じょう}

まづかのうのうそかよものらゆ

程^{とき}遠^{とお}行^ゆく

三^{さん}月^{つき}の達^{たつ}経^き年^{とし}冬^{ふゆ}音^{おと}

毎^{まい}一^{いち}モモ

61

家事多忙にてすうりとてよきのと

太宰大尉もまゐ

たのりとあるとあらむがまのものと

御ふれ情事

御は

まくらをす

く風の下りるをかのよわきやまのうき

達仁二年そとく手拂ひ花

絶絶

はまの院

えのうを言ふすとくしてちみをよしの

西首寺

重く

ありやむようくけりも

古事記合羽衣

立落あら

きひのえみりにゆづけてあらそ

渡

橋

嘉慶二年西首寺を長江二位教成

それゆけはよとくいじのくじうたすま

文治元年あがたせまくとくを徳者

月の丁じまし川

かたそめ

ははひ入る向日又月

育みハまかとみかくらぬひて酒をまれば

みくじのとすと華もとく人あらず

せあり

河正にどううよまのとみのとくのとく

62

里集をひき
朽 中勢の里

うりけのくわいせうむとせよみよ
はせすハまにうりのりせきよみよ

つあよみのくわいせうむとせよみよ
よみよみがよみ

引用氣憚ひうのくわいせうむとせよみよ

山城

暮

和泉

山城

いつく

和泉

山城

雲葉

和泉

山城

百首

和泉

山城

暮

和泉

山城

日

和泉

山城

河房

和泉

山城

あらのくわいせうむとせよみよ

和泉

山城

あらのくわいせうむとせよみよ
はせすハすうかのくわいせうむとせよみよ

和泉

山城

身のまゝ

三行分ト

用
三行ト首イ
木口四等

後鳥羽院御製

羊の人のののせしやまひのうれのとてあと見

唐様百首用

曾志吉文筆(後鳥)

よの申ハセトシニセキハタマリ

門防

源川院ツ向百首

仲宣鶴ト

鳥

遠も八年面すす合前大納戸歌鶴

うきのよすくわみなはくもむかせきのせき

トは判云(左)唐鶴を云うべく用のせき守

三行ト

遠も七年歌鶴を歌す 指が傍教玄光

羊ののせののみのせとつひてせのとよみらま

高麗夷合(うのせ)

大義石と歌

ほるねのせのせとよみらま

於樂(にら)のせのせとよみらま

帝室清

64

卷之二

文淵閣

汪一任題詩

卷之二
江都府志
卷之二
江都府志

あまくもいのせこ城ノ内ノ所
ナ都面首ナ他銀杏地
前半納ミ室歌

嘉慶三年夏
民家內缺糧

○
○
○

續編

也係之年內產亦可有希望也

汪一隱齋

仲尼子思子

66

まづあめうどりさるまゆのまことまのまゆ
お宿記ミタガセキ
新六五 まやこのみくみくしのひとせりひつすばくそ
あ集 廣奥カウ
かきりいのせまうされカキリことへとまくら
あ集玉のくを
おえは原
人金玉た神のカミラよのまくらをいそとのかみた日カミタヒ数カウ
お宿記
中晉カウ
まのたわうそやせのいもとくのやうれもく
お入四年百三カウ萬年庚辰カウ羽カウ
正義二年十月法性カウ住イ殿カウ唐奥カウ
接客あはふ通
あやこまくらをくわくわくらをくわくらを用
次中四住の阿傍三首固カウ卒カウ
中納とあわら
やまくらをくわくらをくわくらをくわくらを
お宿記
正義二年カウ留カウ
暮カウ

彦馬二年百首

高中納之室嗣々

カリヨシトシの國の事へか別れやせど

西門院の百首

陸聖主弘惠名

アラヤモトの事振舞

門に文

歌不和

田

アラヒタ

田

アラヒタの事よもせをこんじてか

法務院附

アラヒタハアリうえと御子と御のものやと百首

高麗國の國

高麗

源仲

アラヒタの事の事の事の事の事の事の事の事の事

法務院附

高麗

アラヒタの事の事の事の事の事の事の事の事の事の事

高麗國の國の國の國の國の國の國の國の國の國

アラヒタの事の事の事の事の事の事の事の事の事の事

アラヒタの事の事の事の事の事の事の事の事の事の事

アラヒタの事の事の事の事の事の事の事の事の事の事

アラヒタの事の事の事の事の事の事の事の事の事の事

アラヒタの事の事の事の事の事の事の事の事の事の事

アラヒタの事の事の事の事の事の事の事の事の事の事

アラヒタの事の事の事の事の事の事の事の事の事の事

69

嘉慶二年六月經政局監督會考
家
人

卷之三

高松院左近の虎
にえ
かみ

閑 河口の庭

六二 河關夜歸

卷之三

嘉慶二年正月
西上任知縣事
朽

御元の事

まことに
のうへん
のうへん
のうへん

卷之三

國力の國

卷之三

卷之三

鄂爾多斯
蒙古人

す
ち
秋
に
枝
は
頭
の
司
し
や
の
角

乙未正月七日
王之寧家書

東陰

少々ちよあつひをうつもうれしてかひまくまくじく
の間

タニタニタナシラリ蓋を

廉清正母

摺りしゆつてぬれ墨とまくらとあよ

うくひすの

摺りしゆつてぬれ墨とまくらとあよ

うくひすの

タニタニタナシラリ筒

仲宣翁

高にせまきはれか
四年のやどるやひがみ

歌集

と春院因幡毛庵女

わらわの衣の用をこしらへてゆつまをそむけす

寛政二年西首園寄 陸奥

平内作

まよひよひよひよひよひよひよひよひよひよひよ

閑

よし人あか

おきの風のう風の世よ城よにゆくらへうらゆ

六三

立

ハラシナリつものうたひてよの園ですとさうつけとよ

百首守園納を

注二位處

毛代よも魚舟へあまくれとてうしてよのせきり

六三

立

ハラシナリつものうたひてよの園ですとさうつけとよ

あまうの園

六三

立

高川院の百首

六三

立

ハラシナリつものうたひてよの園ですとさうつけとよ

歌集

六三

立

よしの風のう風の世よ城よにゆくらへうらゆ

六三

立

ハラシナリつものうたひてよの園ですとさうつけとよ

あまうの園

六三

立

毛代よも魚舟へあまくれとてうしてよのせきり

百首守

六三

立

高川院の百首

六三

立

ハラシナリつものうたひてよの園ですとさうつけとよ

70

あきの日暮れ
やがて
むすめ
ほのまを残す

卷之三

卷之三

まことにアリのあよ風とてくわん
おほき

⁵也終之矣不以少而謂
注之任以能也

卷之三

卷之三
九月
庚午
始行
丙子
歸

逢坂

とやうじゆをせんのくわん
の鳥運は序

のり事にあらうと
人間の爲めに

此之謂也。故曰：「知者不惑，仁者不憂，勇者不懼。」

ぞ
うへきの門と
あさひのあす

トモアヘシムモ開門とソシヒ幕門とソシ

國用の爲めに

وَمِنْهُمْ مَنْ يَرْجُوا
أَنْ يُؤْتَوْهُنَّا مِنْ
عِصَمِ الْأَنْوَافِ

其後又得一卷，題曰《金華子集》。

ふみ百毒手合

一 西園の入合あた國吉

松のまきのうすじよもじ

あふさか

明ほの

はす到處志喜えたのせきのひそとのするの帳

すくいはねへまわるをのまつづるまうづの

5

ニキとすすりけりうちやそれら石門よ行ひ
せきのかどうりとむすや又お門うるこうといそ
のんすくじゆうがん門と戸とひとくちうせ

とそばれ初スヌマツマツリトモヤウルヒミ

あらし

貞吉と年百首用久間

あらし

角の下とねのちとめられわとてあまやうまわ

せき

萬用毛あらまのせき

あらし

あらまとすすり神ハあらまとすすりあらま

あらま

人を神をあらまとすすりあらまとすすりあらま

あらま

萬用毛あらまのせき

あらま

あらまとすすり神ハあらまとすすりあらま

あらま

人を神をあらまとすすりあらまとすすりあらま

あらま

あらまとすすり神ハあらまとすすりあらま

あらま

人を神をあらまとすすりあらまとすすりあらま

あらま

あらまとすすり神ハあらまとすすりあらま

あらま

人を神をあらまとすすりあらまとすすりあらま

72

そのうちやがてそんぞうのうちの用は

御石舟

美金村

萬田

我

我

見

見

通

通

通

通

通

通

通

通

通

通

通

よもやまにまのう用の

通

通

通

通

通

通

通

通

通

通

湯の院附百首

大納言源於

かせ

やうのじゆくらむちくよまのまう用の松風

かせ

かせ

かせ

浪の上

通

通

通

通

通

通

通

通

通

鷺毛錦

通

通

通

通

通

通

通

通

通

達徳二年冬詠百首

通

通

通

通

通

通

通

通

その中

通

通

通

通

通

通

通

通

通

通

通

東仁二年冬詠百首

通

通

通

通

通

通

通

通

通

通

月のからすみの竹の竹の

通

通

通

通

通

通

通

通

通

通

その中

通

通

通

通

通

通

通

通

通

通

通

73

まつたての年をもと用ひて、あらわす。やまとさり
せき 同 むら

あらわす。用ひて、うらみと見よ。源のうらみと見るものなり。

日

むらの郷

津きよ 津の水の源のうらみと見るがよ。ねと

みのの郷

たまらの郷

いづみの郷と見るがよ。れむ たまらのうらみと見る 諸
ひすいの郷と見るがよ。れむ たまらのうらみと見る 人

三所ト

舟

舟と見るがよ。入日みの

にまくと見る

意語二年百そ用ひて、えび野

六毛三

タガヤミのうらみと見るがよ。にみだらうと

六毛三

たち

船と見る

め

人と見る

スコト

あらは

猪と見る

め

人と見る

スコト

あらは

猪と見る

め

人と見る

新千旅

おととしの郷

路

暮

まほの郷

暮

まほの郷

達保ニテ草木百首

五ニ佐喜里石

74

もとたての年をもと用ひて、あらわす。花

白

白

まくらの内にふるえぬ
けかせかは

卷之三

そこにはかば

四

卷之三

名
文
集
序

四

卷之四

卷之三

甲子

卷之三

卷之三

8

卷之三

卷之三

卷之三

卷之三

庚午八月白石齋
畫於內閣

وَمِنْهُمْ مَنْ يَعْمَلُ
كُلَّ حُسْنٍ وَلَا يُؤْمِنُ

卷之三

大前
角子錢

卷之三

三月の風の音と云ふて風と云ふて風と云ふて風と云ふて

霧

西風亭

あらはれの氣

すまの浦の風の音と云ふて風と云ふて風と云ふて風と云ふて

浦

聲

鐵國百首用

白雲寺と空寺と獨樂寺

開の門の音と云ふて風と云ふて風と云ふて風と云ふて

門

かは

白雲寺と空寺と獨樂寺

月

名前も有

のちく風の音と云ふて風と云ふて風と云ふて風と云ふて

月

の音と云ふて風と云ふて風と云ふて風と云ふて

月の音と云ふて風と云ふて風と云ふて風と云ふて

月

祭主イ

登と浦就

すまの浦の音と云ふて風と云ふて風と云ふて風と云ふて

浦

音

鶴毛鈴

鶴

毛鈴

鶴

音

夫木和歌抄卷第二十一

終

